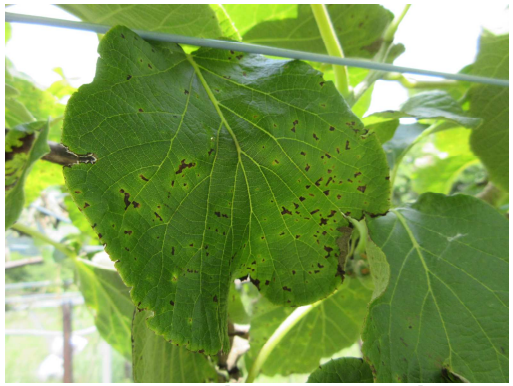
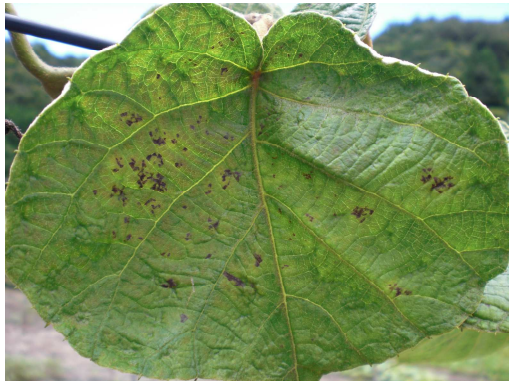
キウイフルーツかいよう病の夏季防除について

かいよう病は*Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae*（PSA）という「細菌」が病原である。
病名は同じ「かいよう病」でもカンキツの病原菌とは種が異なる。
かいよう病に感染した樹では、赤褐色の樹液の流出、葉の褐色斑点、花蕾や新梢の枯死などが見られる。
一度感染すると樹体から菌を除去することはできないため、継続的な防除が必要である。
しかし、かいよう病菌は10～20℃の低温を好み、気温が高くなると感染しないとされていることから、夏季防除の必要性について検討した。

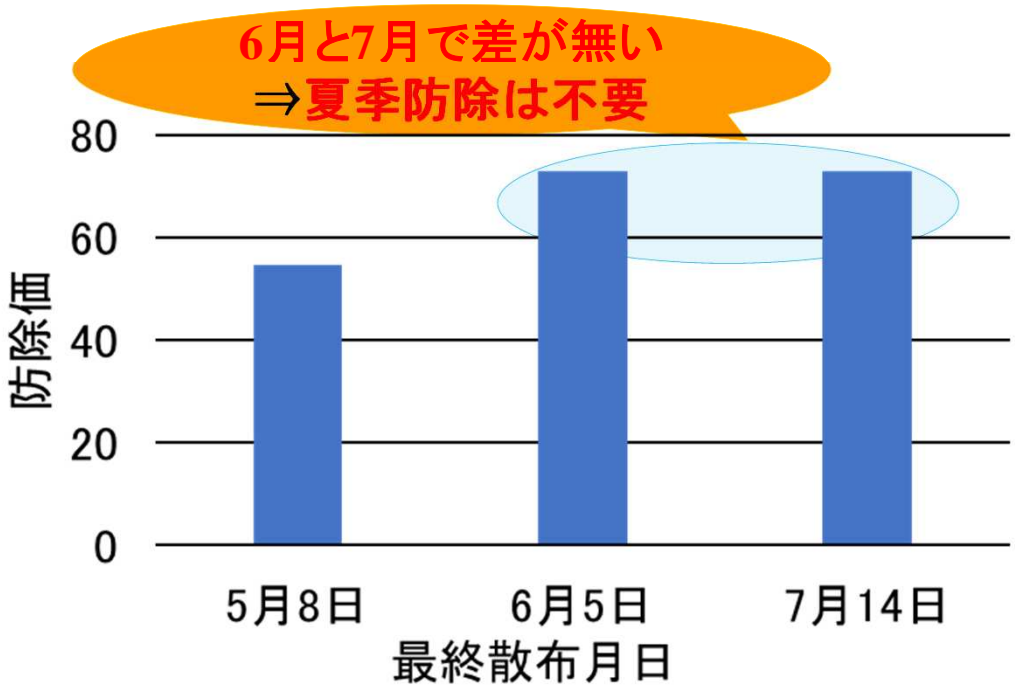


かいよう病による被害



かいよう病ではない類似症状

夏季は葉の類似症状が多くなり、肉眼での識別は難しい。
甚発生条件の無防除園においても<u>葉の感染率は5葉位程度までが多く</u>、以降の葉では減少する。
<u>5月までに発病した葉でも夏季の病徴進展はない</u>
⇒新梢では発芽前から5月にかけての防除が重要



○銅剤の時期別散布による防除効果（ヘイワード）

2017年4月12日、5月8日に炭酸カルシウム剤加用のコサイド3000（2,000倍）を散布後、6月5日または7月14日まで追加散布を実施。
8月3日に葉の発病程度を下記のとおり調査。
指数0：発病無し　指数1：1葉当たりの病斑数が1～3個　指数3：1葉当たり4～11個、
指数5：1葉当たり11個以上　発病度＝　Σ（指数×発病程度別葉数）×100／5×調査葉数）

気温の高い夏季の防除は不要であるが、気温の低下する秋季からは防除が必要